

令和4年度 千葉県高等学校総合体育大会 サッカーの部 総評

令和4年6月11日(土)、12日(日)、18日(土)、19日(日)の日程で千葉県高等学校総合体育大会サッカーの部決勝トーナメントが行われた。先に行われた一次トーナメントの結果を踏まえ、16チームが全国総体千葉県代表の1枠をかけてトーナメント方式で試合を行った。

ベスト4は市立船橋、習志野、日体大柏、流経大柏の4校で、準決勝が柏の葉総合運動公園と岩名運動公園、決勝が柏の葉総合運動公園にて行われ、優勝が市立船橋、準優勝が日体大柏で令和4年度千葉県総体の幕が閉じた。市立船橋は、7月24日(日)から徳島県で行われる四国総体2022に出場する。

今大会の決勝トーナメント進出チームの所属リーグはプレミア2校、1部5校、2部7校、3部2校の16チーム。中でもベスト4進出チームは、県外3種チーム出身の選手が半数以上を占めている状況であった。また、プレミアリーグ所属の流経大柏が準決勝で敗退。関東大会に出場した専大松戸がR16で敗退となる等、上位に進出したチームの実力は拮抗してきているのではないだろうか。

各校のスタイルはあるが、インテンシティを求めたサッカースタイルが目立った。初めからリトリートをしてカウンターを狙うのではなく、ハイプレスからショートカウンターを狙うチームや、ロングボールを活用しながら個のフィジカルを活かし手数をかけずに相手ゴールに迫る攻撃が多く見受けられた。惜しくも準優勝となった日体大柏は、前線の4選手のフィジカルを活かしたサッカーと組織的な守備で流経大柏に勝利しただけでなく、市立船橋を最後まで苦しめた。

2018年以来4大会ぶりの優勝となった市立船橋はインテンシティが高く、ゴール前で決定的な仕事ができる郡司や、高い身体能力で個でも突破できる渡邊、青垣、丸山を初め、主将の北山の精度の高いキックや藤田の打点の高いヘディングを武器とした組織的なセットプレーも相手の脅威となり、決勝でもセットプレーからの2得点を含む3得点で日体大柏を振り切った。

昨年同様、堅い守備ブロックを流れの中で崩すことは難しく、セットプレーやクロスからの得点が勝敗の鍵を握っている。決勝の全5得点中4得点がセットプレーからという状況もあり、守備側の対応の質が求められる。不用意なファールをしないことはもちろん、ボール奪取後に丁寧に繋ぐ判断や、クリアの質が求められる。

R16から決勝までの4試合が土日の連戦となるため、選手層の厚さは不可欠となるが、選手のパフォーマンスを考え、運営上の都合も考えなければならないが、大会日程や試合開始時間等の運営方法の見直しも検討が必要ではないだろうか。

新型コロナウイルスの影響で、入場者数の制限をしながらの大会運営は続いているが、無事に代表校を決定することが出来た。大会運営に関わった全ての皆様へ感謝申し上げるとともに、4大会ぶりに本総体への出場を果たした市立船橋の活躍を期待し、令和4年度千葉県総体の総評とさせていただきます。